



山門豪傑雙録 1865年



第一編章(豊原)豊原、
屋主(伊勢屋兼吉)、
サイズ:縦108.2cm×
横90.3cm
登場人物の足元の縁にさいころの目に応じた移動先が書かれており、振ったさいころの目によって指定されたコマに飛びながら「上り」を目指す。所蔵=吉田修 写真=鶴城 雅



袋絵に描かれた裏方
豪華な山門をせり上げるための木組みの舞台装置です。豪落(床下)で働く人々たちにもスポットを当てるとい、園内の心配りでしょう。

上がりのお神輿と白浪女
豪華なお神輿が上がりです。周りにいる三人の女の名前が愛称を全て示されています。左のは「おさらばお辰」、真裏出身の場取り唄りの悪女。おれ、作っ



異形・巨大・縮端。大宇や博物館のコレクションにもある有名な歌舞伎双六です。舞台は雨押寺の山門。各演目の役者二七名が後上で見得を切っています。屋根上には白浪(浪舟)五人女の素ぼしりお熊や木ねずみお吉が取り手と立ち回りを演じ、二階では白浪五人男の「白浪右衛門」や旗前を使う義賊・兇雷世がはじけています。なんといっても、主役を張っているのは櫻門五三柳の大盛賦石川五右衛門。「絶景かな、絶景かな……」の名台詞が聞こえてきそうです。一階には「柳屋」に登場する不破伴や名吉、屋山三らもいます。

階上の石川五右衛門に、天地の見得で睨みを返す一階の真裏久吉が、物語性と構図の立体感を醸し出した、物語性とは異なる見出しのオールドスタイル歌舞伎名場面双六なのです。

絵師の意匠周囲は羽子板の顔絵で胸を上げ、役者絵を得意としていました。辞世の句は「よの中の人の似かおもあきたればまむまや鬼の生きうつしせむ」を生魂を通じて多くの顔絵を描きました。この双六が作られた年は、長州藩で高杉晋作が尊皇兵、米田は南北戦争が終結、トルストイが「戦争と平和」を発表しました。

文・監修 吉田修
上だ・おきむ 1964年生まれ。品博展松江出身。全道球人情報館編集者兼理事、NPOキャリア学会理事を務める。たから、読文化教育学会会員を務める。たから、読文化教育学会として双六の蒐集・研究・制作にに取り組む。
公式HP = <http://www.sugoroku.net>

● 鶴城雅氏の委員員「浮世絵と双六」内の一場面。

2018

6
JUNE

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30